２０２２年５月２９日復活節第７主日説教

サムエル記上 12 章 19－24 節
使徒言行録 16 章 16－34 節
ヨハネによる福音書 17 章 20－26 節

先週の５月２６日木曜日は、昇天日でした。管区より、その日から聖霊降臨日まで用いる祈りの冊子「み国がきますように　祈りのしおり」が今年も発行されました。皆さまのお手元にお送りいたしましたが、一部英語版をお送りしてしまい、大変失礼いたしました。英語版の方でよかった、とおっしゃってくださる方もおられましたが、日本語版をお渡しできますので、ご連絡ください。

さて本日は、復活節第７主日でもありますが、昇天後の主日でもあります。本日の福音書は「ヨハネによる福音書」１７章ですが、この１７章は、全体が長いイエス様のお祈りです。また、この主日の福音書は、Ａ年、Ｂ年、Ｃ年共通して、すべて「ヨハネによる福音書」です。Ａ年は１７章１～１１節、Ｂ年は１７章１１節Ｃ～１９節、今年Ｃ年は１７章２０～２６節です。この１７章を３年に分けて読むようになっています。これらのことから、この昇天後主日に学ぶことは、イエス様の祈りであると思います。旧約日課も使徒書も、祈りの事柄が関連していますが、本日は、福音書を中心に学びたいと思います。

まず、１７章全体を概観してみますと、イエス様はこの１７章で、三つの事柄について祈っています。その区分は聖書日課のＡＢＣ年の区分と一致するのですが、最初に「自分のため（17:1-11）」、次に「弟子たちのため（17:11C-19）」、そして最後に「弟子たちの宣教を信じて信じるようになる人びとのためです（17：20-26）」。本日の個所は、最後の部分です。

この部分の祈りの言葉は、「**また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします**」（17：20）と始まります。「**彼ら**」とは、物語の中では、弟子たちを指しています。それゆえ、「**彼らの言葉によってわたしを信じる人々**」とは、物語世界の中では、これから信じるようになる登場人物のこととなりますが、物語世界を超えて、今、福音書を読んでいる人、またこれから読んで信じるようになる人々も含んでいます。

イエス様がお願いしている内容は、「**父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください**」（17：21）です。表現は、簡単なのですが、内容としては、大切なことを示しています。父なる神様とイエス様が一体であり、その一体を通して、すべての人が一つとなり、その人々

の中に、主なる神様とイエス様がおられるようにということです。ここには、父と子しか出てきませんが、一つであることが可能になるのは、聖霊の働きが前提となっていると思います。また、一つとなる目的は、「**世**」が「**あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるように**」なるためです。このイエス様の言葉は、単に信じる人が増えるというよりも、主なる神様から離れたこの世界が、主なる神様に立ち返るようにという願いがあると思います。

イエス様は祈りの言葉を続けます。「**あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。**」(ヨハネ 17：22)。ここにある「**彼ら**」は、文脈からすれば、弟子たちを通して、今、信じている人々、あるいはこれから信じる未来の人々です。イエス様は、そのような人々にも、「**栄光**」を与えたと語っています。「**与えました**」は、完了形ですから、彼らが今もその「**栄光**」を保持していることを意味します。「未来」の事柄が、「完了」しているという感覚は、不思議ですが、このような時間の感覚も「ヨハネによる福音書」の特徴です。

「**栄光**」という言葉は、日本語では「輝かしさ」や「ほまれ」を意味しますが、『聖書』における「栄光」、ことに「ヨハネによる福音書」における「栄光」は、それだけではありません。イエス様の十字架の死と復活を通して示される「輝かしさ」や「ほまれ」です。この世的な戦いを経て勝ち取ったような事柄ではありません。その意味では、イエス様は、主なる神様が十字架と復活を通して示されるそのような栄光を、信じる人々に伝えたと語っているのです。それは言い換えれば、十字架と復活を通したと言い換えてもよいと思います。

この「栄光」という言葉は、ギリシア語の二次的な意味から考えますと、「意見」や「教え」という意味を持ちます。その意味から言うと、イエス様は、信じる人々に、主なる神様の「教え」を伝えたことになります。またヘブライ語的の二次的な意味から考えますと、「重し」という意味もあります。そこでは、イエス様は、何を「重し」とするかを、信じる人々に伝えたことになります。これらのことから、ここでのイエス様の祈りの言葉は、イエス様の十字架と復活による救いを与えたのであり、意味を広げてとらえるならば、この世界のものとは異なる主なる神様の教えを与えた、何を重要と考えるかという視点を与えたということになると思います。

イエス様は続けて、「**わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります**」(ヨハネ 17：23)。この言葉の中で、イエス様はもう一度、「**一つ**」であることを繰り返し、その「**一つ**」という関係に「愛」が関わっていることを示します。ここでは、「愛する」という言葉が、過去形で用いられています。過去形であることが示している事

柄は、主なる神様がイエス様を愛したように、信じる人々を愛したと事実を伝えているということです。今信じている人々は、事実として、イエス様と同じように、主なる神様に愛された存在なのです。

「**父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです**」（ヨハネ 17：24）、ここで再び、「共にいること」「愛」そして、「栄光」が語られますが、大切なことは、「天地創造の前から」と表現されていることです。イエス様の出来事は、「ヨハネによる福音書」が書かれた時点でも、過去のことでした。しかし、ここではイエス様と主なる神様との関係が、天地創造の前からであったと語られています。そのような時空を超えた救いの出来事が、今信じる人の前に示されているのです。

「**正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています**」（ヨハネ 17：25）。ここでイエス様は、それまでのことを前提として、「**世**」との違いを述べます。そして、それを受けて、「**わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです**」（ヨハネ 17:26）と続けます。ここでイエス様は、「**御名を彼らに知らせました**」と語りますが、「**御名**」とはもちろん「主なる神様」の名前です。また「知らせる」とは、単に教えるという意味ではなく、その大切さを示すことです。そして、「**彼ら**」とは、弟子たち、そして、弟子たちを通して信じる人々、そのような人々を超えて、「**世**」まで含めていると思います。イエス様は、最後には、この世界のために祈っているといえるのです。このことは非常に大切であると思います。また、「**これからも知らせます**」と訳してありますが、それは、未来形で書かれているからです。この点も大切です。過去に活動され、そして、今、福音書の物語の中で語っておられるイエス様は、これからも主なる神様の名前を知らせると語っているからです。伝える目的は、「愛」を媒介として、イエス様がおられる関係で、人々がつながるためです。

さて、１７章全体を、時間と関係させて区分すると、「ヨハネによる福音書」を読む読者にとって、少し強引ですが、過去、現在、未来とに分けられると思います。「ヨハネによる福音書」の読者の現時点において、過去の事柄としてイエス様は、自分のためにお祈りされていた（過去）。しかし、今、弟子である自分たちのためにお祈りしてくださっている（現在）。そして自分たちの子孫を含め、これから自分たちが宣教することによって、教会の信仰に入ると思われる人々のためにも、祈ってくださっている（未来）と考えることができると思います。また、本日の個所は、未来に向けた部分となるのですが、未来について語りながらも、過去と現在と未来が、混在しています。

「過去」に活動されたイエス様が、「未来」に向けて「今」祈っており、そのイエス様ご自身は、「天地創造の前」から、父と一体であったからです。少し混乱しそうな時間の感覚ですが、大切なことは、この「現在」と「未来」には、わたしたちの東京聖三一教会も、わたしたち一人ひとりも含まれているということです（余計にわかりにくくなったかもしれません）。

お祈りが大切であるということは、言うまでもありません。そしてイエス様がお祈りを大切にされていたことも、すべての福音書の物語の中で描かれています。しかし、イエス様が、弟子たちのために、さらには未来の人びとのためにお祈りしている描写は、本日の個所だけです。そして、１７章は、全体が一つの祈りであり、過去・現在・未来に分類できるとしましたが、同時に時間を超えています。それが「ヨハネによる福音書」の主張です。それゆえに、本日の福音書から物語からわたしたちが学ぶべきことはただ一つです。それは、わたしたちが今までも、今も、そしてこれからも、イエス様によって祈られているということです。わたしたちは、イエス様のお名前を通して、主なる神様に祈りますが、わたしたち一人ひとりは、イエス様に祈っていただいているのです。そのことを知り、心に刻むことが大切なのです。現在、信仰にある人は、過去にイエス様にお祈りしていただいた人であり、今も、お祈りしていただいています。そして、この礼拝にまだきていない人も、イエス様に祈っていただいているのです。

祈ることは、大切な事柄であると同時に、その大切さをわかりながらも、そのお祈りすらできないぐらいに、悲しいこと、つらいことに出会うこともあります。祈り言葉すら出ない時があります。その時、本日の「ヨハネによる福音書」のイエス様は、時間を超えて、すべての人に大きな慰めを与えてくださると思います。イエス様ご自身が、過去も今もこれからもわたしたちのためにお祈りしてくださっているからです。

「ヨハネによる福音書」が書かれたのは、だいたい1世紀の終わりごろか2世紀初頭です。それは地中海世界において、本格的にローマ帝国による迫害が始まった時期でもありました。信仰に入るがゆえに、この世においては苦しみを与えられるという時期です。その迫害は、その後、断続的に２００年以上続きます。まさに祈ることすらできない悲劇に直面した信仰者も多かったと思います。だからこそ、イエス様がわたしたちのために祈ってくださっている、その事実は、大きな励ましであったと思います。

わたしたちも生きている世界も、従来からある様々な問題、そして近年のコロナ禍、さらには今も続く戦いと、苦難や悲しみがあります。今も、祈りすら出来ないときもあると思います。その時、そのようなわたしたちのために、イエス様は今も、これからも祈ってくださっています。ともにわたしたちの教会で祈りつつ、またイエス様の祈りに支えられつつ、これからも歩みたいと思います。